

「人類完成の歡び」より

萬物の靈長である人間は、最も高等であり、豊かな神性を含んでいる。人の心性は宇宙の神性に帰り行く本能を持っている。造られたものは本来の神性をそれ相応に宿し、常に元始に立ち帰ろうとする求心の力がある。萬物が、神に最も近いその理想である人間を恋い慕い、少しでも人間の真似をすることを本懐としているのは、この求心力の現われである。

人のこの世に生まれるや、元よりその心性は神靈につらなり、宇宙の大靈を伊都の千別きに千別きて、降ろされた玉の緒と称する靈線につながれている。肉體は遺伝による父母の細胞染色體から構成され、臍の緒なる條によって母體から養分を吸収して軀形作り出して生まれる。人についてその心性と肉體組織を深く研究するならば、宇宙の真相を理解することが出来る。

大地は所造の最初であり、花であり、実であり、或いは結晶である。その地上に創造され化育しつつある萬物の中で、人はその粹であり、最高の存在である。造化の力は常に新陳代謝して、その止まるところなく、大氣の御働きは無限に萬物を造り出されている。これは遠心的の力である。體の方は萬別に別れ神から遠ざかって行くが、これと逆に、心の方は神へ神へと帰ろうとする求心的活動をやる。神は所造物の中でも自己の映像を完全に写し出すことをもって、人を造る目的とされたものであって、人は宇宙をそのまま身におさめた小宇宙なのである。人は神の子と称し、神性を享けていることは他の何萬倍か量り知れないのである。